

NEWS LETTER

from Iwami Art Museum

March 2012 vol.15



島根県芸術文化センター
SHIMANE ARTS CENTER
島根県立石見美術館
IWAMI ART MUSEUM

島根県立石見美術館ニューズレター

企画展「福富太郎コレクション 鏑木清方と明治・大正・昭和の美人画」

「魔力」を持つ絵

企画展「マンチェスター大学ウィットワース美術館所蔵 巨匠たちの英国水彩画展」

ウィットワース美術館のコレクション

特別展「日本刀の美 一室町時代から江戸時代まで」

日本刀の美?

15



北野恒富《道行》1913年頃 福富太郎コレクション蔵

「福富太郎コレクション 鏗木清方と明治・大正・昭和の美人画」

2012年4月21日(土)～6月4日(月)

休館日:毎週火曜日(ただし5月1日は開館)

開館時間:午前10時～午後6時30分(展示室への入場は閉館30分前まで)

A. 北野恒富 《五月雨》 1916年 福富太郎コレクション蔵
B. 鏗木清方 《薄雪》 1917年 福富太郎コレクション蔵



「魔力」を持つ絵

美術館学芸員や美術史研究者の多くには、「この作品に出逢わなかったら、この世界に入っていなかったかもしれない」という1点があるのではないだろうか。私の場合、それが北野恒富の《道行》(表紙)である。学生時代に福富太郎コレクション展を見に行き、恒富の《五月雨》(図A)など大正時代の大阪の画家たちの絵に心惹かれた。そしてこの時出品されていなかった《道行》を帰宅後に図録で見て、衝撃を受けた。男の肩にもたれる女は虚ろな表情でありながら、見る者の心を驚掴みにする迫力がある。男女の握りあう手には数珠が掛かり、背後には鋭い爪(つめ)と嘴(くちばし)で二人を追いたてるようなカラスが描かれている。不気味な絵だが、金と黒を基調とした画面には荘厳な雰囲気が漂っているようにも見えた。「何だこの絵は!?!」という驚きが、第一印象だった。福富氏の著書^{※1}には、この絵を入手した時のことや、主題が気になって調べたことが記されており、非常に興味深く、また共感を持って読んだのだが、主題は判明していなかった。

当時、私は平安時代の絵画について勉強していたのだが、どうしてもこの絵が気になって、研究テーマを北野恒富と近代の美術に変更してしまった。その後、展覧会に出品された際に実物との対面も果たし、調査

を行う中で様々な美術館の方にお世話になるうちに学芸員になりたいという思いを強くし、今に至る…というわけである。

絵のことに話を戻そう。北野恒富が大正2年の文展(文部省美術展覧会)に出した「小春治兵衛の心中もの(近松門左衛門「心中天網島」のこと)」が落選したことは本人が書き残していたのだが、それが《道行》だとする決め手がなかった。時間だけはたっぷりある大学院生だった私は、ひっそりした大学図書館の閉架書庫をウロウロして古い本を見るのが好きだった。ある時、『現代の日本画』という背表紙の題字にひかれて1冊の本を手にとった。それは文展審査員だった松本亦太郎博士の著書で、大正2年の文展審査についての所感も収録されていた。そこには《朝露》と題した北野恒富の「驚くべき」絵が落選したことが記され、この絵に強い思いを抱いたのか、図柄についての詳細な描写や落選理由についての考察もあった。この記述が《道行》と一致するので、ページをめくりながら宝の山を掘り当てたようにドキドキしたことを覚えている。主題が分かったことも嬉しかったが、初入選の2年後にこの凄まじい絵を美術界の権威たる文展にぶつけた恒富の強い意志や、技術的には入選作を凌駕する作品をモラルの

面で排除した文展の判断を非常に興味深く思い、小論を書いた^{※2}。

不吉な主題ゆえか、この絵は福富氏が公開されるまで長らく人目にふれなかったようだ。ひと目見て「なんとしても入手しようと思った」という福富氏と、落選作の意義を見抜いて記録を残した松本博士の慧眼に、同じくこの絵に魅せられた一人として感謝し、敬意を表したい。同時に、この絵が持つ「魔力」ともいうべき、人を惹きつける力を改めて思う。

福富コレクションにはもう1点心中もの名品、近松の「冥途の飛脚」に取材した鏗木清方の《薄雪》(図B)がある。冷たい世間に追いつめられた二人の切迫感、そして遊女梅川のいじらしさを、こちらは黒と青と白を基調として描きあげた美しい絵で、やはり人を惹きつけてやまない力を持っている。この2点の競演が本展の大きな見どころと考えている。心中という背徳的な主題を堂々たる名画に昇華させた2人の画家の技量を、とくと感じてほしい。

※1 福富太郎「絵を蒐める私の推理画説」(新潮社、平成7年)

※2 川西由里「北野恒富《道行》について」

(『待兼山論叢』第34号美学編、平成12年)



図1



図2



図3

図1. ポール・サンドビー《南西の方角から望むコンウェイ城》1802年 ウィットワース美術館蔵

図2. J.M.W.ターナー《ルツェルン湖の月明かり、彼方にリギ山を望む》1841年 ウィットワース美術館蔵

図3. 大下藤次郎《猪苗代》1907年 島根県立石見美術館蔵

ウィットワース美術館のコレクション

イギリス・マンチェスター大学の附属施設であるウィットワース美術館は、世界的に有名な英国水彩画のコレクションを所蔵している。本展は、この3000点以上の水彩画のコレクションから選りすぐった約160点を紹介する展覧会だ。

ウィットワース美術館は今から120年ほど前に、当時綿織物の生産とその取引において世界の中心だったマンチェスターに設立された。その名前は、精密機械の仕事によって富を築いたジョゼフ・ウィットワースにちなんで名付けられた。つまりこの施設は、彼の遺産によって創設されたのだった。ウィットワース美術館は当初から、工業製品、主にテキスタイルを収集対象としていたため、充実したテキスタイルのコレクションを持っている。同時にコレクションの中心となる水彩画の収集も行われ、特に個人による作品の寄贈が大きな役割を果たした。以後多くの寄贈作品と美術館の購入作品によって、現在の見事な水彩画コレクションとなったのだ。

西洋における水彩画は、18、19世紀のイギリスでその黄金期を迎えたとされる。ウィリアム・ブレイクやジョン・コンスタブル、J.M.W.ターナーといった水彩画の巨匠は、いずれもこの時代のイギリスで活躍し、水彩画はイ

ギリスの「国民的美術」とも呼ばれる。本展では、この時期の作品をほぼ年代順に展示して、黄金期の英国水彩画の進歩の歴史を紹介する。

水彩画は、油彩画に比べて携帯に便利で、絵の具の乾きが早い、戸外で描くのに適している。また、天候により変化する光と大気を素早くとらえられるため、風景画が好んで描かれてきた。本展覧会の出品作品の多くも風景画であるが、特に18世紀以降、イギリスの水彩画家が、多く描いた風景画の主題に、イギリス国内の大聖堂、修道院、教会、城砦があった。絵にするのに適した光景「ピクチャレスク」としてとりあげられ、観光旅行先としても有名になったのだ。さらには、イギリスの山岳地方の光景も、感動的な景観として多くの画家を惹きつけることになる。

イギリス国内の風景に加えて、海外の風景も好んで描かれた主題である。アルプスを越える観光ルートによって、古代遺跡や美術品の宝庫であるイタリアを訪れる上流階級の人々が増え、この海外旅行は「グランド・ツアー」と呼ばれた。「グランド・ツアー」を経験した人々によって、その風景を描いた水彩画が画家に注文されたのである。1815年にナポレオン戦争が終わると、さらに

遠方への興味が広がった。それまでは実際に訪れることがなかった中東に、画家が直接赴いてその風景を描くようになるのである。

こうしたイギリスの水彩による風景画は、明治時代の日本に大きな影響を与えている。ちょうどウィットワース美術館が開館した頃、イギリスの水彩画家が日本を訪れ、その繊細な写実性、日本の画家たちが魅了されたのだった。なかでも1892(明治25)年に来日し、個展を開いたアルフレッド・パーソンズは、当時の日本の身近な建築物や自然や風俗を卓越した技巧で描き、驚きをもって迎えられた。森鷗外ゆかりの画家として、当館で多くの水彩画を収蔵している大下藤次郎もこうした画家のひとりだった。当館の収蔵品にみるように大下もまたイギリスの水彩画家たちのように、国内各地、そして海外へ旅行し、さまざまな風景画を残している。

本展で、長い歴史のなかで形作られてきたウィットワース美術館の水彩画コレクションの名品を、ご堪能頂きたい。そして、大下藤次郎を始めとする日本の水彩画家たちが、理想的なモデルとした英国水彩画の伝統を感じていただければ、幸いである。

特別展

「日本刀の美 一室町時代から江戸時代まで」

2012年3月31日(土)～5月14日(月)

休館日:火曜日(ただし5月1日は開館)

開館時間:午前10時～午後6時30分(展示室への入場は閉館30分前まで)

日本刀の美?

日本茶、日本酒、日本食、日本画、日本髪、日本庭園…。「日本〇〇」というこの語法は、とりわけ明治時代以降、わが国の伝統的な文化事象を表すために用いられてきた。ここで紹介する日本刀という言葉もその一つだ。この国で古くから作られ使われてきた刀を指してそう呼んでいる。

ところが日本刀の場合、その用例は意外に古く、11世紀の中国北宋の詩人・欧陽修の「日本刀歌」という詩に見ることができる。これは当時の中国において、日本製の刀が高品質な舶載品として知られていたことに想を得たものである。もちろん日本語としての「日本刀」は近代の所産だが、日本製の刀が一千年もの昔、海外で高く評価されていた事実には意を留めてよい。

「日本刀歌」では日本製の刀は「宝刀」と称され、香木の鞘には魚皮を貼り、真鍮と銅で飾られた様は金銀と見紛うばかり。大金で取引され、腰に帯びれば妖凶を祓うともいう。はるばる渡海した舶載品へのロマンティズムを感じさせる側面も含め、日本刀の文化的なありようが示されているといえる。

しかし本来、刀は殺傷のための利器である。用途は極めてシンプルである。それゆえ造形的な観点からしてもシンプルこの上ない。ことごとく無駄を排したところにあるべき姿がある。「日本刀歌」で詠まれたその美しさは鞘などの外装にあった。では刀そのもので

ある刀身に美があるとすればどのようなものだろうか。

現代において刀が銃刀法で所持すら規制される存在でありながら、登録された「美術刀剣」がこの限りでないのは、刀身に美を認めるからである。けれどもシンプルを極めた造形は、一見、近寄りがたい。

歴史的にみてもよい。文献上、刀について記述した古例としては『古事記』(713年)に「十拳劍」「草薙大刀」などが見られる。本来の字義では劍は両刃、刀は片刃の違いがあるが、古い史料では混在している。『古事記』では同じ刀劍の表記でも「大刀」と「劍」の両方が用いられるが、『日本書紀』(720年)では概ね「劍」で統一する。

草薙劍はスサノオがヤマタノオロチを退治して、その尾の中から見出したもので、のちにアマテラスに捧げられて以後、三種の神器の一つとして天皇の権威を象徴した。ヤマタケルの東征伝では難局を切り開く重要な役割を果たした。刀には利器としての機能を超えて、物語性が付与され、象徴性が担われてきたのだ。

鉄で作られた刀は酸化により錆が生じる。とはいえ、研磨することで元の輝きや鋭さを取り戻すことができる。そのこともまた刀の特性の一つである。ゆえに古来の刀が時代を超えて重用されたのだ。武器としての性能に優れることはもちろん、多くの大儀ある戦闘

を経てきたその物語性が一振の刀に名刀としての榮譽をもたらす。時の権力者がこぞつて由緒ある名刀に魅せられてきた。

こうした伝統が刀の鑑定を発達させたといえる。茎に刻まれた銘だけでなく、刀身自体の姿、鍛練によって生じた地鉄の模様、刃に現れる独特の焔めきなど、刀のもつ視覚的な特徴を見ることによって、製作された時代や作者、産地を定めることが必要とされた。

ここに刀に美を見る契機を認めることができる。一見、無駄のないシンプルな造形をもつ殺傷の利器である刀、その一振一振の個性を見極めることが名刀に近づくプロセスだった。個性を見極める中で、個々の刀の造形的特徴が見分けられ、その個々の造形的特徴に良し悪しの評価がなされた。良しとするところを美と呼ぶことができる。

鎌倉時代、当代きっての文化人として知られた後鳥羽上皇(1180-1239)は刀の鑑定にも優れていたという。『増鏡』(14世紀)には後鳥羽院のこととして「劍などを御覧じ知る事さへ、いかで習はせ給へるにか、道の者にもややたちまさりて、かしこおはしませば、御前にてよきあしきなど定めさせ給ふ」とある。「道の者」とは、つまり「目利き」である。刀の価値は切ってわかるのではなく、見てわかるのだ。

(椋木賢治 当館学芸グループ課長)



《短刀(銘:吉則/応永十一年二月日) 室町時代 1404年 島根県立古代出雲歴史博物館蔵》